

卒業生に

贈る
言葉

平和の道具として 用いられますように



松山義則
総長

邪馬台国をめぐる数多くの論議が沸騰してから久しくなります。わが国の各地に遺跡が発見されるたび毎に、古代を夢みるロマンを追う人びとの心をうごかしてきました。このことは、われわれ人間の起源を追うことであり、また往時の未知の世界を知ろうという思いがあります。近時、人類学、考古学、遺伝学、古生物学、地学をはじめ、地球や宇宙、生命に関係する諸科学の発展とその総合的な研究から、人類の起源についての多様な発見や知見が続きつぎと発表されてきています。

地球の歴史をさかのぼってみると、ノアの洪水に物語られたように、二〇〇万年ばかり以前から四回にわ

たつての巨大な規模に及ぶ長期の水河期、雨期をくりかえしてきました。シベリア、蒙古などを襲った最後の厳寒の水河期は七万五〇〇〇年から一万年あまり以前までの長い期間にわたって生じ、それは氷点下六〇度、七〇度の寒さであつたらうと言われていますが、この間に生き残つた人類は、何百世代にわたつて厳しい自然環境に耐えて順応し、その環境の影響を受けてきました。この時代の人びとの生活、社会、文化そして精神について思いをはせることは、邪馬台国のそれに比較してはるかに遠く、またそれを知ることは特段にむずかしく、将来の学問の進展をまたねばなりません。しかし、後期旧石器時代の遺跡や遺物から、狩猟採集の生活様式と、それぞれの地域差からかなりの知的想像をはたかせることはできましよう。

モンゴロイド人種形成についての仮説はよく知られています。この寒冷地に順応した体型を自然淘汰によつてつくり出し、身長を低くすることによつて、皮膚面を小さくして放熱を守り、寒冷下に露出する顔面は脂肪をつけて平らになり、こおりついて凍傷のもとになる鼻は低く、ひげは少なくなり、寒気から眼球を保護するために眼ぶたに脂肪が定着して一重の眼ぶたになつたと説明しています。このような身体的、体型的順応による変化には、その人たちの社会、文化、精神が相即していたと思われれます。下つて日本の場合、一万年ばかり以前の縄文の人びとの生活や精神については遺跡からも身近に感じられるものがあります。

ひるがえつて現代の人間をみると、このところの人間の知的活動は多彩なものとなりました。科学技術の進歩発展はめざましいものであり、ことにその応用側面の進展は人間生活の利便性を高めるものとなっております。その恩恵を受け、技術操作を日常的に行使するには、自分の技能としてとり入れ、各種多様な学習が必要となつていきます。現代の科学的思考のすすんだ整合性や厳密性などの多様な展開を通して、新しい知見、技術を産出しています。そしてこれは、社会や人間行動の未来予測の可能性とその制御を高めるまでですんでいきます。

またこのような科学技術の進展にもなつて、社会的存在としての人と人との関係には欠かせないメディアの発展が、強力にはたらいっています。そこで人びとはメディアから多くの影響を受け、その内容を吟味咀嚼する猶予もあたえられないままに、多様多量の考え方をとり込まれています。特定のオピニオンが投与され、メディア操作や説得にさらされているという反省や、その公共性にもとづく批判が、識者のなかで強調されています。かつて思想統制にメディアが用いられた過去の経験が、新しいメディア体制のなかで再現しないことを願わねばなりません。

人類はその進化の何百万年にわたる過程を通して、自然環境と社会環境のなかで生活し、文化を形成構築してきました。そして現在、われわれはその先端に世界の人びととともに生きています。しかも現代は人間がつくり出した文明のもとで、自然との関係、人間と人間との関係において数多くの危機を内蔵しています。言うまでもなく自然破壊の問題は地球宇宙規模の人間のみならず生態系の破滅をまねくものであり、また人と人、集団と集団、思想と思想との不幸な対立と抗争は人間関係、社会関係のなかで宿命的ともいふべき状況を露呈しています。信念と信念との対立が、民族や宗教の激しい戦争にまでなっています。

われわれ人間は有限であります。いつかはその生命を終り、この世を去るものです。しかしそのことを頭では十分に知りながら、人びとはそれが自分に起る実感をもちにくく、たがいに有限で無力であることに、気づくのを恐れ、人類史的にそうであったように、この世の戦いに、勝つことにみに執念し、そのむなしさを忘却していると思えます。聖フランチェスコの平和を求める祈りはよく知られていますが、これはつぎのように述べています。

わたしをあなたの平和の道具としてお使い下さい。

憎しみのあるところに愛を、いさかいのあるところにゆるしを

分裂のあるところに一致を、疑惑のあるところに信仰を誤っているところに真理を、絶望のあるところに希望を

闇に光を、悲しみのあるところによるこびをもたらしものとして下さい。

慰められるよりは慰めることを、理解されるよりは理解することを

愛されることよりは愛することを、わたしが求めますように

わたしたちは与えるから受け、ゆるすからゆるされ自分を捨てて死に、永遠の命をいただくのですからこの静かな平和を求める祈りには、苦しみのなかでの忍耐と努力、そして人間の弱さの極限で、神のゆるしと助けを願う人間のすなおな思いと祈りを聞くことができます。人は生存するかぎり苦悩のなかにあつてすごさねばなりません。聖書はまたつぎのように教えています。

あなた方が会った試練で世の常でないものはない。神は真実である。あなた方をたえられないような試練に会わせることがないばかりか、試練と同時にそれに耐えられるようのがれる道も備えて下さるのである。

われわれはひとりひとり立って歩んでいる有限で、孤独な存在です。ときには憎しみと恐れに襲われます。また、自分の希望がかなえられ、この世の戦いに勝ってみても、底深い不安とかなしみがそこはかとなくおしよせてきます。しかしこのような苦痛にみちた試練にも神のみ手がはたらき、耐えていくところに、真正のよろこびがわき出してくるものと思えます。

大学を出てこれから遭遇されるであろう数多くの苦難に向って、けなげに力強く対処していかれる卒業生の方がたが、勇気をもち、くじけることなしに明るく生涯をすごされるように願います。神のお守りがあなたの人生の上にゆたかにありますよう心から祈ります。

卒業生に

贈る
言葉キヤノンと
セルフ・スタディ

岩山太次郎

大学長

ご卒業おめでたく存じます。卒業される皆さんに心よりお祝いを申しあげます。

一九九六年三月に学部を卒業される皆さんは、特別な意味で、大きな期待がよせられている方々です。それは、新制大学の歴史の中で、一九九一年六月にその教育課程に大きな改革がなされ、皆さんはその第一回目の入学生であり、卒業生であるからであります。この教育課程の新しいあり方が、期待通りの成果を生むことを願って入学された方々でありますから、卒業後、皆さんが色々な分野で活躍されることでも、それ以前の前教育課程のもとで学ばれた方々とは違うものであってほしいと、わたくしたちは願っています。より個

性的であってほしいし、またそうでありうると考えられた教育課程で、皆さんは学ばれた方々であります。日本の大学はどの大学の場合でもそうでありますが、文部省が定めている規定にのっとって教育課程を組まなければなりません。いわゆる「大学設置基準」というものにそって教育活動を展開しているのであります。同志社大学では、これまで、「大学設置基準」の許す範囲を最大限に利用して、建学の精神が生かされ、学生一人ひとりがその個性をより自由に発揮しようするような教育課程を組んでまいりました。しかしそれでも、「大学設置基準」はかなり大きな規制になっていました。

その「大学設置基準」が、一九九一年六月に、大幅に改正されたのであります。いわゆる「設置標準の大綱化」と言われるもので、色々な基準が大幅に緩和されました。たとえば、「一般教育科目三分野三六単位、外国語科目八単位、保健体育科目四単位、専門教育科目七六単位」という卒業必要最低単位一二四単位の区分がなくなり、それぞれの大学が、またそれぞれの学部が、一二四単位を自由に設定できるようになったのであります。個々の大学が、より自由に、より個性的に教育課程を編成できるようになりました。

しかし、この「大綱化」には大前提があります。「自己評価等」といわれるものがそれであり、そこには次のような条文があります。「大学は、その教育研究水準の向上を図り、当該大学の目的及び社会的使命を達成するため、当該大学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行うことに努めなければならない。」いわゆる「自己点検・評価」と言われているのであります。

この「自己点検・評価」という考え方は、アメリカの大学の「アクレディテーション」からきています。アメリカには日本の文部省にあたるような国の機関はなく、その代りに、大学が自発的に組織を作って、自らがその教育研究の向上に努めています。そういう組織団体（大きなものは六地域の地区団体、三九の専門分野団体、それらに小さな団体を合せると一五〇ほどある団体）が、自発的に大学を認定するのを「アクレ

「ディテーション」と言うのでありますが、どの団体にも共通するものに、数年から十年ほどの間隔で加盟している組織に審査を受けるときに提出するものに「セルフ・スタディ」という報告書があります。自らが教育研究の現状を点検し、評価し、水準をより向上させる未来に目を向けた方策を検討するものであります。ここで重要なことは、それぞれが何を基準にして検討するかとありますが、それはそれぞれの大学の理念・目的であります。それが「キャンオン」なのであります。

同志社大学の「キャンオン」は明確に規定されています。学則第一条がそれであつて、「キリスト教的教育の特色を発揮する」ということが基本にあることであります。皆さんも入学以来、何度も耳にし、目にしてこられた「同志社大学設立の旨意」にあるように「基督教主義を以て徳育の基本」とし、「独自一己の気象を発揮し、自治自立の人」を養成すること、これが同志社大学の「キャンオン」の基本であります。

大学が自らが自発的に「セルフ・スタディ」を通して、その教育課程を編成することを可能にした一九九一年の「設置基準」の改正後の、皆さんは第一回目の入学生であり、卒業生であります。皆さんの中には同志社大学の「キャンオン」がより鮮明に、より深く浸透していると信じています。皆さんも卒業後、同志社大学の「キャンオン」を皆さんの「キャンオン」にしていきたい、そしてその「キャンオン」で未来に目を向けた「セルフ・スタディ」をつづけられ、これから進まれる色々な分野で、大いに活躍されることを期待します。

創立者新島襄は、一八八七（明治二〇）年六月一九日、仙台の東華学校開校式に臨むため、同志社の卒業式に出席できなかつたとき、卒業生に一文を寄せました。それにはこうあります。

諸君よ、今日我が日本の改良は、襄、諸君に望むにあらずして、將た何人にかこれを望まん。然れど

も、誤って尊大の思ひを為すなき様惧み、益々勉め、信以って一身を天父に任せ、義以て一軀を邦家に抛ち、志操をして清からしめ、目的をして高からしめ、尚ほ進んで真理の源泉に溯り、學術の奥蘊を究め、歴史の沿革を探り、人事の秘訣を弁へ、泰然として書生の資格を備え、兀然として学者の品位を保ち、英意勇進、些々たる障碍の爲めに辟易せず、区々たる情実の爲めに牽制せられず、天父の諸君に負はせ給ひし所の義務を尽し、本分を竭し給はん事、襄の諸君に向ひ切望して止まざる所なり。

そして、新島は次のように言います。これはまさに、「キャンノン」にもとづいた未来に目を向けた「セルフ・スタディ」の目標とするところであります。その言葉を私は皆さんに贈りたいと思います。

「進め進め…決して退歩の策を為す勿れ。」

卒業生に

贈る
言葉

石中火あり

兎玉実英
女子大学長

このたび幾多の試練を越えて、無事卒業していく皆さん方、同志社女子大学あるいは同志社女子大学短期大学部を卒業していく皆さん方に、一言、お祝いと励ましの言葉を申しあげます。卒業おめでとう。心よりお祝い申しあげます。皆さん方は、人生の大きなふしめを越えられたのです。健康に気をつけ、これからは社会のため、大いにがんばってください。そして自分のためにも益々人間に磨きをかけていってください。

この先、皆さんは、履歴書に必ず同志社卒業、と書くこととなります。同志社で学んだことを誇りに思い、自信をもって社会の中で生かしていただきたいと思います。

これからの世界は、メガ・コンペティションの時代とよくいわれます。今まで日本を含め先進国といわれてきた国々の人口は、約八億で、その人たちが多くの新しい製品を作り出してきました。しかしこれからは、そこへ東欧、ロシア、アジア、ラテンアメリカなど約三十億の人々が参入してきます。そうとう激しい競争がおこなわれる時代に突入していくだろうといわれています。

同志社は自由な教育や良心教育をモットーとしてきました。皆さん方は在学中、知らないうちに自由な発想、柔軟な思考を身につけておられることと思います。変化に対応する力とともに、責任感、良心を身につけておられることでしょう。それらをもって、新しい社会で思う存分、たくましく活躍してください。

村上春樹の『羊をめぐる冒険』の中に、こんなシーンがあります。渋滞にまきこまれた東京のタクシーの中で、突然運転手が主人公に「私はクリスチャンです。教会には通っていませんが、ずっとクリスチャンです」といい出すのです。

「ふうん」と僕はうなった。……「神様に会ったことがあるの」

「もちろんです。毎晩電話をかけています」

「しかし」と言ってから僕は少し迷った。：「しかし、みんなが神様に電話をかけたとしたら、回線が混みあつていつも話し中になるんじゃないかな？ たとえば昼すぎの電話番号調べみたいにさ」

「その心配はありません。神様はいわば同時的な存在なんです。だから一度に百万人の人間が電話をかけたとしても、神様は百万人の人間と同時に話しくなりませす」

オースドックスな神学から見れば、おかしい方かもしれません。しかしここでは、おそらく神の遍在性、

同時性を比喩的にいつているのでしょうか。

新島襄先生は、けっして「神様」ではありません。また、熊本バンドの人たちが作りあげた重厚長大なイメージの方でもなかったようです。もっと明るく親しみやすい面ももった方だったようです。卒業後、毎晩でなくて結構ですが、ときに新島先生に電話をかけたつもりで、同志社で学んだ大切なものは何だったのか、同志社精神とはどんなものか、思い出していただければ幸いです。

田村明という人の『イギリスは豊かなり』（東洋経済新報社、一九九五）という本がありますが、その中に次のようなエピソードがあります。

日本人のS君夫妻がロンドンに行ったときの事です。滞在最後の日の夕暮どき、リージェント街でウェッジウッドの店にはいり、それぞれ一番気に入ったデザインの淡青色の美しいコーヒークップを一つずつ買ったのだそうです。そのあと、繁華街の街並の写真をとって歩いているうち、荷物を落とし、せっかく選んだカップを二個ともわってしまいました。その時刻ではもう店は閉まっている、困ったなと思ったとき、ある紳士が近づいてきて、腕をとるようにして、もう一軒のウェッジウッドの店に連れて行ったというのです。紳士はその店のマネージャーだと名のり、ドアを自分の鍵であけ、二人を招き入れ、こわれたカップと同じカップをもってきて、とりかえてくれたというのです。S君夫妻は、驚き、かつ感激し、紳士にできるかぎりの謝意を表し、心が明るくなって帰国した、ということでした。

著者は「イギリスでは、物質的な豊かさのなかに、物では表せない《なにか》を育ててきた。…そういうものをもつ国が金では計れない本当の豊かな国というものではないだろうか」と述べています。

皆さん方を迎えてくれる社会は、皆さん方の成長を願っているはずで、ドラッカーがいうように、企業であれ学校であれ、究極的な目的は人を作ることにあるべきでしょう。多くの上司は、皆さん方の仕事だけ

でなく、人生にも深い関心をもって暖かく声をかけてくることでしょう。しよせん世の中は一人で生きられません。皆さん方も感謝の気持をもって上司や同僚に接し、またその他多くの人々に接し、きびしい社会ではあろうけれども、お互い一回きりしかない人生を、思いやりの気持をもって、豊かに過ごしていくことを願っています。

石の中には、一見火など入っているように見えます。しかし石で石を激しく打つと、火花が出ます。同じように人の中にも火があります。皆さん方の人生においても、とくに岐路においては、火花を散らすようにがんばってみてください。